



小松左京研究—SF文学と日本像の再構築—

徐, 翌

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2021-03-25

(Date of Publication)

2023-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7945号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007945>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論 文 内 容 の 要 旨

論 文 題 目

小松左京研究—SF 文学と日本像の再構築—

氏 名 : 徐 翌

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 梶尾文武 准教授

(副) 樋口大祐 教授

(副) 大橋完太郎 准教授

要 旨

一九六四年、小松左京は自身の文学観、国家観を集約した評論「廢墟の空間文明」を著した。一九六四年は『日本沈没』の構想が始動した時期でもある。新幹線開通や東京オリンピックの開催も記憶されるこの年は、小松左京のSF文学を紐解いていく重要な節目として捉えるに相応しい年である。ところが、このターニングポイントを迎えるまで、小松左京はまだ揺れ動く青春時代を過ごさなければならなかった。

本論文の第一部では、一九四九年から五三年までの京都大学在学中、思想上では「共産主義と実存主義」に塗れ、行動上では「空想と文学」に揺れた五年間の動向に注目する。当時、小松は「モリ・ミノル」名義でSF漫画を掲載出版し、左翼活動にコミットする傍ら、高橋和巳と交友を深め、「京大作家集団」「土曜の会」「ARUKU」「現代文学」などの同人雑誌に参加し、実名・小松実の名のもとで純文学習作の発表を続けた。あらゆる作家にとってそうであるように、初期習作は、作者の内的感動や自己告白を最も露骨に伝え、その文学の根源的思想傾向を示す。京大時代の小松作品もまた、漫画と活字のいずれも、のちの小松文学の根底に流れる思想の面影を表出している。第一部は、この時期における小松左京の文学同人、漫画活動を調査し、彼がSF文学を書き出すまでの思想的な準備＝SF文学創作の原点を検証するとともに、その作業を梃に同時代の日本文学・社会思想を把握したうえで、当時の小松が描画した日本像について考察する。

京大を卒業した一九五四年から、「廢墟の文明空間」を発表した一九六四年にかけての十年間で、小松は様々な仕事をしながら、同人誌活動を通じて自身の文学観を整理し、SFの方法論に目覚めた。この小松SF文学の始動期にあたるディケードに関する検討として、森下一仁による評論「小松左京の「文学」—迷路の果てに」（『小松左京マガジン』四九巻、13・5）が参考となるので、詳しくはそちらに譲りたい。純文学の試作を『対話』に発表していた小松は、六三年に開催された第二回SFコンテストにおける「受賞の言葉」で述べたように、「いわゆる“純文学”から、足を洗いたいと思ってSFを書き出し」、それによってはじめて「文明批判」を書くことができるという確信を深めてゆく¹。小松のSF文学の出発を正式的に告げた作品が、触れた『地には平和を』と『日本アパッチ族』である。この二作の作品分析に加え、小松が同時期に注力した『対話』の同人誌活動および商業誌（例えば、『団地ジャーナル』『別冊サンデー毎日』）での執筆活動・台本創作などについて整理・検討を行うことが、本論では十分に扱えないが、今後の課題となろう。

本論の第二部は、小松左京のSF作家としての創作活動が本格的にはじまる一九六〇年代に焦点を当てる。日本が経済高度成長期を迎えて凄まじい繁栄を見せた時代であり、世界的にも情報社会が高度化しつつあった。そのような時代の中で、「科学的認識」や産業技術に強い関心を抱いていた小松は、未来に時代を設定し、未来世界を描くSF小説家としてデビューを果たすと同時に、彼は“SF作家らしく”未来をめぐる活動を多様に展開していく。

小松左京は単に文学にとどまらず、京都大学人文学研究科（以降、略称「京大人文研」を用いる）の知識人・学者たちが陣営を構えた「朝日放送」のPR誌『放送朝日』（全二五九号、75・12に終刊）に与し、小説執筆の傍らに、一九六四年七月に「万国博を考える会」を発足させ、それが六六年に「未来学研究会」へと成長していく。翌六八年に「日本未来学

会」にコミットするなど日本未来学の成立にも一役を買った小松は、学者だけでなくメタボリストやクリエイターたちとも盛んに交流し、学際的な活動に勤しんだ。そして、そのような領域横断的な活動は、彼が一九七〇年に開催された大阪万博でサブプロデューサーとしての参加に繋がっていく。さらに、小松の歴史、実存、未来などの一貫した問題意識の下で、『未来の思想』（中央公論社、67・11）も出版されている²。

実際、この日本SF文学界を代表する作家の著作を刊行順に並べれば一目瞭然だが、それらは一九六〇年代と一九七〇年代に集中的に産出されている。前掲『未来の思想』も含めて、小松左京の「三大思想本」として並称されるのが、『地図の思想』（講談社、65・11）、『探検の思想』（講談社、66・11）である。それは、京大人文研の面々と親しい小松が、『放送朝日』の企画に応じ、一九六三年九月から、六六年九月にかけて手掛けた「エリアをゆく」（『放送朝日』）という紀行文連載を単行収録した二冊である。

この当時、今西錦司や梅棹忠夫など京大人文研の学者にリードされる日本文化人類学の浸透と並行する形で、「神話・古代史ブーム」が訪れていた。なおかつ、東京オリンピック前後に推進されたインフラ整備と国土開発の後押しにより、ジャーナリズムにおいてルポルタージュが多出した。「エリアをゆく」は、こうした背景下で誕生した連作である。小松は『古事記』や『日本書紀』または各地の「風土記」などに注目し、日本の土地を足で感じながら、古くから日本に伝承される古代神話を自作に取り入れ、歴史から現代における意味を探ることを試みる。ただし、そこでSFの手法を用い、「SF仕立て」にしたところが、小松の特色である。それらの作業もまた彼の日本（文化）論、文明論の一角を占めている。

本論の第三部では、小松の代表作『日本沈没』を論ずる。本作が出版された一九七三年、日本は高度経済成長期の終焉を迎え、世界的にも石油ショック（一九七三年）の影響により経済的な先行きが不透明さを増し、不穏な情勢を呈した。六〇年代のマスメディアで喧しく盛り上がっていた「バラ色の未来」にとって代わって到来したのが、「終末論ブーム」であった。そんな中で上梓された五島勉『ノストラダムス一迫りくる一九九九年七月、人類滅亡の日』（祥伝社、ノン・ブックス、74・11）は、刊行後まもなく映画化されるなど、『日本沈没』と同じコースを取ったベストセラーである。これらの書物は起爆剤のように「終末」の気分をより一層増し、不穏な情勢を助長した。『日本沈没』もまた、「終末論ブーム」の一環をなしているのである。

『日本沈没』の再読にあたって、終末的な要素が前面に押し出された結果、長年終末論的な文脈で読まれてきた本作を再評価する。『日本沈没』の中に埋め込まれた「核」のイメージに着目し、新しい「政治小説」としての再解釈を試みる。本作出版当時の石川喬司の指摘を継承しつつ、テキストの具体的な引用に基づいて作品に潜在する「核」のモチーフを検証したうえ、小松文学の核心に潜む「廢墟」の方法論を実証的に論じる。それと同時に、坂本義和や大江健三郎の「核時代」をめぐる言説を参照しつつ、それらと小松との共通点と差異を指摘し、七三年前後の社会思想・言説動向に小松を位置づけてゆく。また、『日本沈没』の語り手をめぐってテキストの分析に関しては章を改めて踏み込み、ナラトロジーの視角から本作を捉え直す。スケールの壮大さゆえに俯瞰的な視点が中心を占めるという印象を与える『日本沈没』だが、実際には、登場人物に寄り添う局限的な語り配置されている。そのことの意味を明らかにすることが、ここでの狙いである。

このように一九七〇年代に入って科学技術に支えられた明るい未来像が虚像であると認識された背景には、公害問題や環境破壊などによる科学への不信感の高まりが挙げられる。革命運動も、よど号ハイジャック事件（一九七〇年三月三十一日）やあさま山荘事件（一九七二年二月一九日～二月二八日）が社会に衝撃を与え、民心の乖離の決定打となる。安保闘争後の左翼勢力の退潮に合わせて、いわゆる政治からサブカルチャーの流れにコミットする若年層が拡大した。そうしたなかで流行したのが、ノストラダムスの大予言に代表される終末論である。

最後に第四部では、終末論がささやかれた一九七三年の世相が汲み取られた総合雑誌『終末から』（全九号、筑摩書房、73・6～74・10）の解題を行なう。本誌創刊時からの参画者の一人に、小松左京がいたことは、また彼の作品『日本沈没』が終末論ブームの流れにくくりこまれることにあずかるところが大きい。本誌は、大手出版社である筑摩書房から発刊されたにもかかわらず、短命だったこともあり、現在では稀覯性が高い資料であると言える。今後の小松左京研究の効率的な展開に寄与できる基礎資料を整備すべく、本誌の傾向と論調およびその参加者の一人である小松の活動について、確認しながら整理を加え、本誌の執筆者一覧を付す。

以上、本博士論文の問題意識と構成を概観してきた。小松左京はどのような思想と方法のもとに「戦後日本」を捉えていたのか。この作家の想像力に戦争の「廃墟」はどのような影を落としているのか。そして、SF文学のなかで、小松が幻視しようとした、来るべき「日本像」はいかなるものか。時代背景を踏まえつつ『日本沈没』を中心に作品解釈の更新を試み、こうした問いにアプローチすることが、本博士論文が目指すところである。

-
- ¹ 『SFマガジン』（63・1）に掲載されている、小松左京「お茶漬の味」が受賞した際の発言から引用。その掲載以降、小松はほぼ毎月のように同誌に作品を発表する。
 - ² 『未来の思想』を俎上に乗せ論じる先行言説として、藤田直哉による評論「二十一世紀に小松左京を読むということ——『未来の思想』再読」（『小松左京マガジン』三九巻、イオ、10・11）が参考となる。